

日本語版への序文

本書は、1989年度にアジア経済研究所が実施した「ASEAN 等経済開発政策現地研究」事業（マレーシア）の成果の英語版 *Malaysian Economy : Policy and Structural Change* (ed. by Hisashi Yokoyama, ASED Series No 9, Institute of Developing Economies, Tokyo, 1990) を日本語訳したものである。

マレーシアは他の ASEAN 諸国が相対的によく知られているのに比して、日本国内では、進出企業の関係者の周辺を除いてはあまり知られていない。いまだに、ゴム、錫の一次産品輸出国で、未開の土地がたくさん残っているくらいのイメージしかないのではなからうか。確かに、現在でも輸出の40%以上は一次産品であり、ゴム、原油、天然ガス、熱帯木材、パーム油などは重要な輸出品である。しかし、実際には、1人当たり国民所得が、タイの2倍以上の1810ドル（世界銀行1987年推計値）で、半導体の（ここ数年のうちにはカラーテレビについても）世界最大級の輸出国であり、急速に工業化しつつある国である。1989年には製造業品の輸出が輸出総額の50%を越え、かつ、すでに、国内総生産に占める製造業のシェアが、農林漁業のそれを上回っているから、半工業国であるといってもよいであろう。

もちろんこうした工業化の進展には外国投資、とりわけ、日本からの直接投資の果たした役割が大きい。今後の成長にとっても外国投資の流入は不可欠である。にもかかわらず、日本を含めた多くの国々にとって、マレーシアは依然として上に述べたくらいのイメージしかもたれていない。マレーシア政府はこうした現状に鑑みて、何とか国際社会にアピールすべく、さまざまな方策を施している。例えば、重要な国際会議やイベントの開催、国際観光年（1990年）の制定などである。もちろん本書はこうしたマレーシア政府の

意図にあわせて出版するものではないが、少しでも日本におけるマレーシアに関する理解の一助になれば幸いである。

いまひとつの本書の読み方として、より一般的な視野、例えば、発展途上国の工業化の視点から読むことが可能かもしれない。一般に天然資源の豊富な国は工業化が遅れるということがよくいわれる。確かに、工業化に成功したといわれる日本やアジアニーズ (Asian NIES) の国々は賦存する天然資源を短年の間に枯渇させるか、もともとほとんどなかった国である。これらの国々に対してマレーシアはこれまで長い間天然資源、あるいは (天然資源のひとつと考えられる) 熱帯の土地に依存した一次産品を輸出してきたが、同時に、工業化も着実に進展させてきている。この意味で、マレーシアの独立以来の経済を分野別に展望する本書は、天然資源の豊富な発展途上国が工業化を考える際の参考になるかも知れない。同じ問題を探る開発経済学への一発展途上国からの問題提起と考えてもよい。

わずか5カ月の執筆期間でこのような問題提起を十分に反映させたととは思えないが、少なくとも、今後期待される本シリーズの2作目、3作目にはこうした視点を盛りこめるよう努力するつもりである。

この場を借りて、本書の執筆者を日本語の読者のために執筆順に紹介しておこう。

第1章を担当するジャーファー・アーマドは、現在マレーシアの中央銀行 (Bank Negara Malaysia) のアドバイザーであるが、実際は経済部門の総責任者で、同行におけるナンバー3であるといってもよい。毎年3月に報告される「年次報告」執筆者のトップでもある。週に数回のテニスを欠かさない穏和なスポーツマンでもある。

第2章は、これまでマレーシア国立大学 (Universiti Kebangsaan Malaysia) にも籍をおいていたが、今後は本格的に戦略国際問題研究所 (Institute of Strategic and International Studies) 副所長に専念することになったイスマイル・サリーが執筆している。彼は、両眼に障害をもっているが、マレーシアにおける財政の第一人者として評価が高く、また人望も厚い。

第3章のアブダル・アジズ・ラーマンは、マレーシア農業大学 (Universiti Pertanian Malaysia) に所属しているが、同時に、マレーシア経済研究所 (Malaysian Institute of Economic Research) の研究員としても精力的に活動している。農業経済が専門であるが、産業連関表に精通しており産業構造問題に関する気鋭の研究者である。

この1月までマラヤ大学 (University of Malaya) 経済行政学部長をしていたモクタル・タミンが第4章の農業構造を担当している。活動範囲が広く、日曜日には必ず農作業を行ったり、美術も好む文化人である。

以上の海外留学経験のある研究者たちと異なり、マレーシアで学位を取得し、現在マラヤ大学に所属するタン・エー・チャイが輸出構造を第5章で担当している。不思議なことにマレーシアでは、国際経済学を専門にする人が多いとはいえないが、その中でも将来を期待される若手である。

最終章を担当するアジア経済研究所の横山は、1989年10月に同研究所海外調査員としてこのプロジェクトのためにクアラルンプールに赴任している。これまで、東・東南アジア地域全体の産業構造について理論的、実証的な分析を試みてきているが、これから数年はマレーシアを対象とした実証分析に専念する予定である。

終わりになってしまったが、邦訳するにあたり数多くの人たちにお世話をいただいた。翻訳してくださった方々、監修、事務処理などを担当してくれた調査企画室の同僚に心から謝意を表したい。

なお、巻末に日本語版への付録として、最近時の事情を『アジ研ニュース』(アジア経済研究所の月刊広報誌) から再録しておいた。日本の読者に最近のマレーシアの政治経済の実情も知っていただきたいがためである。

クアラルンプールにて

横山 久